

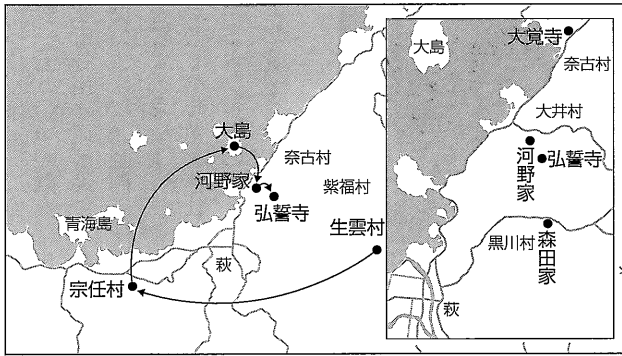
寄稿

沢宣嘉卿、奈古村に現はる

東京ふるさと阿武町会幹事長 三浦 孝夫

■生野の変に敗れ：

文久三年（一八六三）八月十八日の政変で、長州藩は京都から追放された。その際、三条実美をはじめとする七人の長州派の公卿も京都を追われ、長州に落ち延びた。世にいう「七卿落ち」である。そのうちの一人、沢宣嘉卿は二カ月後の十月、平野國臣らに擁立されて但馬の生野で挙兵するが、「生野の変」、わずか三日で敗れ、敗走した。四国を経て翌元治元年六月、再び長州に戻った沢卿は、長州各地を転々とし身を潜めて暮らした。最初、生雲村に潜入し、大谷忠兵衛・久七親子の許に身を寄せた。但馬以来の高橋甲太郎が随従した。八月下旬には大津郡宗任村（三



沢卿は長州各地を転々とした

隅町）、次いで萩沖の大島に渡った。翌慶應元年（一八六五）二月二十六日には、再び海を渡って大井村字門前の河野篤衛方に身を寄せ、さらに五月十五日、同村字本郷の臨濟宗弘誓寺に移った。同寺での潜居生活は、慶應三年十二月二十日に三条実美卿らを追って京都へ出発するまで二年半余り続いたのである。（以上は「福栄村史」による）

■池田梁蔵宛ての手紙

さて、私は防長倶楽部の昨年三月の会報に寄稿して、郷土（阿武町奈古）江戸時代は徳山藩奈古村）が輩出した志士「池田梁蔵」について紹介した。畔頭を務める有力農家の長男に生まれながら京都で学び、家督を弟に譲って文人としての生活を目指したが、尊王攘夷の思いは断ち難く、文久二年（一八六二）上京して国事に奔走、江戸での捕囚生活にも耐えた。明

治二年（一八六九）にはロンドン渡航を果たし、これからという時に惜しくも病に倒れた。その波乱万丈の生涯の研究を定年後のライフワークに定めた私は、東京にお住いの池田家ご子孫宅に残された当時の手紙類などの調査を昨年来、続けている。

今年二月、いつものとおり調べを進めていて、一通の手紙に目がとまった。

只今ハ大ニ御苦勞申上候、扱今、春川卿大覚寺江參詣被遊候、兼而御噂申上候通り拝謁之義何とか御周旋被下度奉存候、尤、松琴宅かまたは精舎にても暫時御休息有之
□□□□如何候哉、里川氏と御相談被下候而可然取計□□□□

二十七日

青波雅兄

□齋

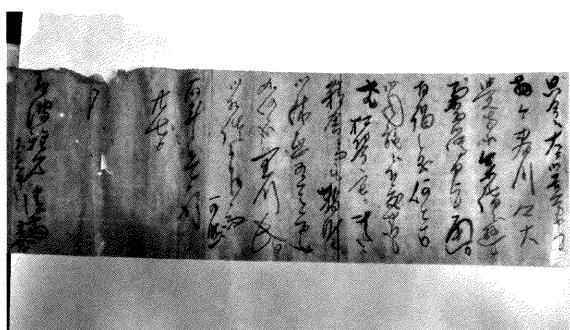
日付は二十七日、宛先は青波で、これは梁藏の号である。差出人は

特定できないが、梁藏の文人仲間と思われる。

文意は「春川卿が大覚寺を参詣されているので、拝謁できるような周旋してほしい。松琴宅か精舎でしばらく休憩してもらったらどうか、里川氏とも相談してよろしく取り計らい下さい」というものだ。

大覚寺は奈古村にある曹洞宗のお寺で池田家の菩提寺である。松琴は奈古浦の庄屋西村利右衛門の号だ。里川氏は医者で、当時の奈古村の文化サークルの中心にいた。では、春川卿とはいったい誰のことか。

それはすぐにわかった。春川は沢宣嘉卿の号である。つまり、沢卿が奈古村にやってきたことをこの手紙は物語っているのだ。「大井隠棲中は狩獵や絵筆に託してしばしば紫福村をも訪れた」（福栄村史）といわれる沢卿が、隣村の奈古に足を運んだとしても少しも不思議はない。



沢卿の奈古来訪を告げる手紙

■里川家に残る色紙

沢卿が奈古に来たことを示す確かな資料は、ほかにないだろう。まず、大覚寺に問い合わせてみた。しかし、住職によると、寺にはそのような言い伝えはなく、当時の文書類も残されていない、ということだった。

次に訪ねたのは里川家。里川家は医業を家業とし、当時の奈古村の医家の大御所的存在である。五代目玄岱が京都・大阪で学び、六代目玄微が継いだ。梁蔵の時代、奈古村には里川玄茂と鈴木研斎という二人の医者がいたが、兩人とも玄微の子供で、弟の研斎は鈴木家に養子に行き、同家を継いだ。里川家は、本業の医療のほかには豊かな知識と資金力を生かして詩文・和歌・書画などの文芸活動にも力を入れ、当時の奈古村の文化サークルの中心にいた。このことは、里川家に梁蔵をはじめとする当時の文化人の作品が額や掛け軸などに装丁されて大切に保存されていることから頷ける。

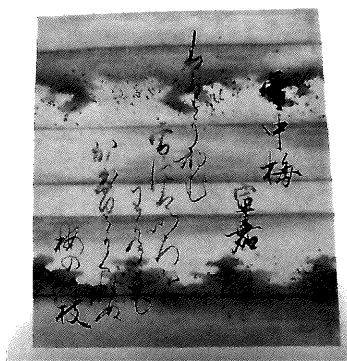
里川家で調査を続けている時に、現在の当主、陽平氏が「阿武郡奈古医家里川家書画目録」を持ってきた。昭和五十一年六月六日に、萩の郷土史家田中助一氏に依頼して調査、まとめたものという。ペ

ージを繰っていくと、「沢宣嘉筆和歌小色紙」と書いてあるではないか。「あつたー」と私は思わず声を上げた。現物はどこにあるのか。陽平氏は掛け軸の巻物類などを収めたいくつかの箱を取り出し、中をあけてひとつずつ見ていった。「小色紙」とあつたので、色紙を懸命に探したが、いっこうに見当たらない。開いた箱を元の場所に戻し、里川家を辞したところ、その日の夕方、陽平氏から電話があつた。「ありましたよ」。早速、駆けつけて事情を聞くと、沢卿の「和歌小色紙」は掛け軸に装丁されていたのだつた。

それを見ると、細長い掛け軸の真ん中あたりに、沢卿の和歌を書いた色紙が置かれていた。「雪中梅」の歌題の左下方に「宣嘉」の署名がある。公卿流とでもいうのだろうか、独特の雰囲気を感じさせる筆跡である。

この色紙が沢卿の親筆であると

断定するには専門家の鑑定を待たねばならないが、「宣嘉」署名の色紙の存在は、沢卿が確かに奈古村を訪れたことを物語っている。



里川家に残る沢卿の色紙

■慶應三年一月二十七日

では、沢卿が奈古村に来たのはいつのことか。最初に紹介した手紙には「二十七日」とあるだけで、年の記載はない。手がかりは沢卿の和歌の題「雪中梅」である。雪をかぶった梅の花が見られるのは、

旧暦では一二月だろう。沢卿が大井村にやってきたのは慶應元年二月で、同三年十二月までいた。可能性としては慶應元年、同二年、同三年の三つがある。一方、梁蔵は元治元年九月から慶應二年五月まで江戸で捕囚生活を送り、解放されて徳山に着いたのが慶應二年六月十一日だから、慶應元年と慶應二年は候補からはずれる。残るのは慶應三年一二月である。この期間、梁蔵が奈古村にいたことを示す資料は果たしてあるだろうか。

なんとということか、それがあったのだ。

江戸の捕囚生活から解放され、徳山に帰ってきた梁蔵は「身柄一代御蔵本付、高十五石」を与えられ、晴れて士分(下士)に取り立てられた。そして、萩の徳山屋敷を山口に移転する普請を担当する。慶應三年一月から七月にかけて行われた同普請の一部始終は、池田

家に残された「山口御屋敷御普請諸日記」に記録されている。それを見ると、梁蔵の動静がわかる。移転普請に奈古村の大工を伴った梁蔵は奈古と萩、山口の間を何度も往復した。同日記によると、慶應三年一月二十五日に梁蔵は奈古に帰省し、二月三日に大工の源太郎を連れて萩へ行っている。つまり、一月二十五日から二月二日まで、梁蔵は奈古にいたことが知れるのである。手紙の日付「二十七日」が慶應三年一月二十七日だとすれば、梁蔵は確かに奈古にいた。移転普請のため奈古の大工を連れて行く算段をしていたのだ。手紙の冒頭に「只今ハ大ニ御苦勞申上候」とあるのはそのことを指している。ちなみに二月は十二日から十七日まで萩に来ていたが、その後は山口に戻り、二月二十七日に奈古にいた可能性はない。

以上のことから、次のようなことがいえる。大井村の弘誓寺に潜

居していた沢卿は慶應三年一月二十七日、隣村の奈古村の大覚寺を参詣した後、池田梁蔵や里川玄茂など「社中」(後述)の者たちと会い、歓談し、歌を詠み、色紙に認めて里川家に残した。

■黒川村の森田家



現存する森田家屋敷

福栄村史によると、弘誓寺に潜んでいた沢卿の世話をしたのは、黒川村の森田忠助である。黒川村は弘誓寺のある大井村本郷とは山

を越えた反対側にある隣村。森田家は、苗字帯刀を許され、代々庄屋を務めてきた豪農である。その屋敷は、毛利の殿様が鷹狩の際に休息をとったといわれ、武家屋敷をしのぐ作りが随所に見られるという。現存する屋敷は国の重要文化財に指定されている。忠助は十二代目だ。

森田家はまた、吉田松陰の養母久満の実家である。松陰は杉家から吉田家の養子となったが、翌年、養父の吉田大助賢良が亡くなったため、松陰は叔父の玉木文之進から山鹿流兵学師範になるべく厳しい指導を受けた。ところが、養母の久満は健在で、実家の森田家に身を寄せていた。このため、松陰は森田家をよく訪れていたという。黒川村は萩の城下町から山中を石州へ向かうと最初に行き着く村で、杉家からは近い。松陰は当主の忠助やその長男の伊助と親しく、ふたりの名前は松陰の著作にも出て

くるといふ。

この森田家は奈古村の池田家とも関係が深い。森田忠助と伊助が連名で、京都で国事に奔走する梁蔵に宛てた手紙が池田家に残されている。森田忠助と森田楨助連名の新年の挨拶状もあり、両家は親戚関係にあったのではないかと思われる。

沢卿の世話をした森田忠助、森田家と（親戚関係にあった）池田家、池田家の菩提寺大覚寺、梁蔵とサークル仲間の里川玄茂、これらは一本の糸で結ばれており、これが梁蔵らの沢卿拝謁を可能にしたのだろう。

■阿字雄家と河野家と里川家

大井村字本郷の弘誓寺跡の背後を百メートル上ったところに滝（阿字雄の滝）がある。このあたりは阿武火山帯の溶岩丘の底部に位置し、玄武岩の柱状節理がみられる珍しい滝だ。



阿字雄の滝

弘誓寺は現在、もはや残っていないが、代わって阿字雄家の邸宅がそばにある。城壁を思わせる立派な石垣は往年の阿字雄家の勢いを思わせる。この阿字雄家には、沢卿が所持していた刀とその小物類、沢卿から贈呈されたといわれる明治天皇の服が伝わっている、

という。

また、福栄村史には、沢卿が描いた「平原瀑布の図」（水墨画）の写真が掲載されている。弘誓寺潜居中に訪れた紫福村の平原瀑布（雄滝）を描いたもので、絵の所有者は河野利長氏、写真は長府博物館提供とある。河野利長氏は、沢卿が一時、身を寄せた大井村門前の河野家ゆかりの方であろうか。以上は既知のことだが、今回、奈古の里川家に、沢卿の「和歌小色紙」（掛け軸）が残されていることが明かされた。埋もれていた出来事が掘り起こされ、沢卿の潜居生活に新たなページが書き加えられたのだ。

■誇るべき「社中」

最後に、当時の奈古村の文化サークルについてふれておこう。池田家に残された手紙を見ると、「社中」という言葉がよく出てくる。「社」とは漢詩や和歌・俳句など

を創作して競う結社、いわば文化サークルのこと。「社中」とはそのメンバーのこと。結社の名称は明らかではないが、当時の奈古村でこうした活動の中心にいたのが里川家だ。そのために別棟を建て、「嶺南村舎」と称した。その扁額が今も、里川家に残っている。玄茂の父親の玄微はここで村内の若者を集めて漢詩や和歌などの指導を行い、梁蔵もそうした若者の一人だったに違いない。

梁蔵は亡くなった玄微のことを「先大人」と呼び尊敬していた。後に京都でさらに勉強して帰り、自宅敷地内に別棟を建て、「垂楊舎」と名付けた。そして梁蔵は結社の指導的存在となったのだ。「社中」には、松琴こと西村利右衛門のような有力者がいた。前述の手紙の中にあつた「精舎」は、「社中」のひとりが持つ別邸であつたと思われる。

沢卿に拜謁したのは、この「社

中」の面々であつた。彼らの感激はいかばかりだったか。当時の奈古村知識人の意欲あふれる活動を誇りに思う。



里川家に残る「嶺南村舎」扁額

（おわり）